

すことにしたい。

「資本主義には、成長することと、さらにこの成長をなんとか維持することが運命づけられています」

「強いられる脱成長は、選択した脱成長とは別物なのです」「持続可能な発展という「概念」自体が、最初から曖昧なものだったのです」

「成長は解決すべき課題ではあっても、解決法ではなかったのです」

これらを受けて、「私たちのスローガン…「より良く生きるために、働く量を減らそう」となり、さらに続く。

「脱成長という考え方の意味は、政治における近代性の解放という昔からのプログラムをリフレッシュすることです」

「私たちは、もはや成長を聖なるものである「かのように」あがめることはできません」

そして「脱成長というのは、第三の道で、自ら選択した節制という道です」と締め括られる。

初邦訳の二〇一〇年に初来日、一三年にも再訪日したラトゥーシュ自身は、もっとも、滞在中にあわただしく全国を駆け巡っており、「訳者あとがき」で生物学研究者の佐藤直樹は「脱成長を唱えることと実践することとのギャップ」を指摘している。とはいえ、訳者の一人が生物学研究の立場から解説を加えていることを読むにつけても、分野の違いを超えて、現在求められている根本的な考え方が

そこに見出せるのではないかとの思いは強い。

私自身がとくに共感を覚えたのは、たとえば「持続可能な発展」への疑念の表明である。実は私が勤務している教員養成学部の場合では、ESD (Education for Sustainable Development) すなわち「持続可能な開発のための教育」なるものが、それなりに注目され、それに関する研究も進められている。そもそも「国連ESDの10年」として二〇〇五―一四年の期間が定められ、その後継プログラムも二〇一四年第六九回国連総会に提出予定(一〇月末段階)なのだそうだが、「開発」が「持続可能」という語義矛盾の正体が明らかにされた感がある。

また、広井良典は『定常型社会―新しい「豊かさ」の構想―』(岩波書店、二〇〇二)『グローバル定常型社会―地球社会の理論のために―』(同、〇九)と今世紀に入ってからずっと提案してきているが、人口減で縮小していく必然を考えれば、それも楽観的すぎないかとの懸念も抱く。

個人的な感覚でいえば、この二十年余り教科書編集に関わってきたが、該当する年代の人口により生産量の総体があらかじめ定められてしまっており、しかもそれは確実に年々減少しているわけで、この業界の切実さを見るにつけて、社会全体としても、どうやっても縮小再生産にしかならないのが今後ではないかとの見通しに至る。

ラトゥーシュの初邦訳が二〇一〇年だったことは、時代